（第3種郵便物認可）　毎　日

川口で「バク転技能検定」の資格認定

特技で終わらせない

多士彩々（たしさいさい）

南加奈子さん

バク転をマスターしてヒーローになろう――。できるとちょっと自慢になる「バク転」（後方回転）。そのワザを資格として認定し、バク転をさらに普及させようと、川口市の一般社団法人「日本バク転協会」が2018年9月から「バク転技能検定」を始めた。バク転を資格認定するのは全国でも同協会だけで履歴書にも書ける。代表理事の南加奈子さん(40)は「一目置かれるバク転を特技で終わらせないで」と呼びかけている。【畠山嵩】

――体操を始めたきっかけは。

◆母が体操をしていて、引っ越しの際に体操教室を探し、五輪選手を輩出している戸田市スポーツセンターに小学4年から通い始めました。選手コースに所属して練習に励み、高校は体操の強豪・戸田高（現戸田翔陽高）に進学。得意種目は床でした。インターハイに出場する一方で、練習中に右膝を痛めました。日本体育大では体操競技部に入部したものの、高校時代のけがの影響で選手の道を断念。部内で選手をサポートする女子指導部に移り、代表を務めました。

――「バク転」に注目した理由は。

◆大学卒業後は体操の経験を生かし、関東や関西の大規模テーマパークでパフォーマーとして活動しました。採用では面接時に実技を披露して力を見てもらいますが、社会で客観的に体操の技術力を示す方法がないことに気づきました。

協会を設立したのは18年2月。自分のような、オリンピアンでも日本代表でもない無名の体操選手はたくさんいて、一般の人たちから「すごい」と言われるバク転はできる。体操経験者にとってバク転は特別なものでも何でもないのです。バク転している自分たちもその価値に気づいていませんでした。バク転を、例えば就職活動の面接で一つの話題になるような、社会で役立つものにしたいという思いがありました。

――バク転を教える教室も増えているそうですね。

◆バク転を教える教室が増えている流れもあります。教室が増えれば指導者も必要となりますが、皆が体操経験者というわけではありません。バク転の教え方などについて確立された基準もなく、何が安全か、正しいかも分からない。そこでテキストを作って一定の基準を示し、一般の方々にバク転を身近に感じてもらいながら、安全で正しいバク転を広めたいと思いました。

――検定試験の内容は。

◆小学生対象の「バク転ジュニアマスター検定」、中学生以上が対象の「バク転マスター検定」、17歳以上対象でバク転の指導ができる「バク転インストラクター検定」の3種類があります。ジュニアマスター検定は動画での審査のみ。他の2検定は、まずインターネットでバク転の知識を問う1次試験を受けます。合格すると2次試験に進み、バク転する姿を撮った動画をLINEで協会へ送り、協会が動画を見て合否を決めます。いずれも合格すると認定証がもらえます。

2検定については半年以上かけてテキストも執筆しました。「『自転車に乗れる！』も必要な動作が異なるだけでできる理屈は同じ」「動作を理解したら、あとはほんの少しの勇気」など、怖いと思われがちなバク転への不安を解消するよう心がけました。2月現在、受検者は300人を超え、小学生から30代の女性や50代の方もいます。老若男女問わずチャレンジできるのがバク転です。大人の中にはバク転に憧れる人も多く、資格取得で達成感も増します。バク転をマスターし、皆さんもジャニーズのようになりませんか。

――随時掲載

みなみ・かなこ　1979年7月生まれ、川口市出身。戸田高でインターハイ出場。日本体育大に進学後、けがに悩まされ指導者に転向し、体操競技部女子指導部の代表を務めた。2010年、体操教室の運営会社を夫と共同で創設。18年2月に日本バク転協会を設立した。